

# 文教厚生常任委員会会議録

[平成25年 5月20日開催]

南あわじ市議会

# 文教厚生常任委員会会議録

日 時 平成25年 5月20日  
午前10時00分 開会  
午後 0時03分 閉会  
場 所 南あわじ市議会委員会室

## I. 出席委員、欠席委員、事務局出席職員及び説明のために出席した者の職氏名

### 出席委員（6名）

委 員 長	小 島 一
副 委 員 長	川 上 命
委 員	楠 和 廣
委 員	原 口 育 大
委 員	蓮 池 洋 美
委 員	登 里 伸 一
議 長	森 上 祐 治

### 欠席委員（なし）

### 事務局出席職員職氏名

事 務 局 長	高 川 欣 士
課 長	垣 光 弘
書 記	川 添 卓 也
書 記	前 田 浩 子

### 説明のために出席した者の職・氏名

委 員 長	郷 野 祐 佳
職 務 代 理 者	轟 孝 博
委 員	古 川 太 郎
委 員	前 川 美 津 子
教 育 長	岡 田 昌 史

## Ⅱ. 会議に付した事件

1. 教育現場の現状について…………… 3

## Ⅲ. 会議録

## 文教厚生常任委員会

平成25年 5月20日(月)

(開会 午前10時00分)

(閉会 午後 0時03分)

○小島 一委員長 それでは、皆さんおはようございます。

きょうは、文教厚生常任委員会の委員さんと教育委員会の委員さんの意見の交換会というか、ざくばらんな御意見を交換したいなというふうなことでお願いをいたしました。本当に、公私忙しい中を本日御出席いただきまして、本当にありがとうございます。

きょうは忌憚のない御意見を伺いたいということで、インターネットの中継は、本日は中止をしておりますので、御了承いただきたいと思います。

多岐にわたるというか、教育全般にわたりますので、教育委員さんのほうからまた、議会なり行政に対して思っていることを教えていただき、我々のほうからも教育委員会に対してわからないところ等、また御質問させていただけたらなというふうに思っておりますので、本日はひとつ、よろしくをお願いいたします。

委員長。

○委員長(郷野祐佳) おはようございます。

きょうは文教厚生常任委員の方々に教育現場の現状について知っていただくということで、今回の懇談会の申し入れは本当にありがたく思っております。

子供たちは地域の宝であり、これからの未来を担っていく子供たちをいかに育てるかということが、よりよい社会につながると思っています。そういう意味で、教育が一番大切な分野であり、子供たちによりよい教育を提供できるように考えていかなければならないと思います。そのためには、学校、家庭、地域社会が一体となって協力し合うことが大切です。ちょっと前までは問題が起こったら学校内で解決するのが当然であり、外部に知らせるのは恥だという考えが強かったように思いますが、今はそういう時代ではありません。学校から、包み隠さずに報告をいただいて、教育委員会事務局から教育委員のほうにもきちっと情報を提供していただいて、みんなで学校を支えていかなければならないと思っております。

実は、つい最近、体罰事件の報告があり、私のほうにも事務局のほうから早急に連絡がありました。それで、緊急に会議を開きました。この件につきましては、後ほど、教育長のほうから報告させていただきます。

昨年から、いじめ問題や体罰問題で、学校と教育委員会が注目され、非難を浴びております。文教の先生方は、住民の代表であり、教育委員会に入らないような情報をキャッチすることがあるかと思っております。そのような情報は提供していただいて、また、教育に関する予算を十分に確保していただくというようなことでも、学校と教育委員会を力強く支援

していただきたいと思っておりますので、どうかよろしくお願ひいたします。

○小島 一委員長 そうしたら、私のほうで進めさせていただいてよろしいですか。

本日から、南あわじ市議会ではクールビズということで、ノーネクタイ、好きなエコスタイルというか、気候に応じたスタイルで来ておりますので、その点、御容赦のほうよろしくお願ひしたいと思います。

それでは、委員の方、まず教育委員さんのほうから何か、御質問等ございましたら、挙手の上、このマイクの上のスイッチを入れていただきましたら、オンします。赤くなったら入ってます。どなたからでも結構でございますので、御意見、御質問ございませんか。

楠委員。

○楠 和廣委員 私の私見という問いかけになるとは思いますが、ゆとり教育が平成14年から取り組まれて、週5日制になって、いろいろとメリットの部分、またデメリットの部分メディアで取り上げられて、特に現場の子供さん、児童、生徒さんの学力の低下が強く言われているところでございますが、そんな流れの中で、国の所管の文科省のほうでは、そのゆとり教育の見直しということで、週6日制、土曜日もというような方向転換が言われておるんですが、市の、新しくこのたび教育委員さんになられた方々が多いわけですが、市の教育現場、また、教育委員さんとしてどのような、そうしたゆとり教育の部分について、また、国の方向性の取り組みについて、どういう見解を持っておられるか、聞かせていただければありがたいと思います。

○小島 一委員長 今、楠委員から、ゆとり教育についてということで質問があったわけですが、これは楠委員、どうでしょう、全員の方から聞くのか、それともどなたか1人で。

○楠 和廣委員 できたら全員の方に。ゆとり教育の見直しとか取り組みの方向性の変化に対してどのような、地方自治体の教育現場としてどのように考えておられるかを聞かせていただきたい。

○小島 一委員長 全員ということは、要するに公式な見解じゃなくて、それぞれ委員さんの考えを、思っていることを述べていただくということでよろしいですか。

○楠 和廣委員 はい。

○小島 一委員長 ということでございます。よろしく申し上げます。  
委員長。

○委員長（郷野祐佳） ゆとり教育というのは、土日休みになっている中で、保護者と子供たちとゆっくりと時間を過ごそうというような意味もあったと思いますが、今の現状では、共働きがふえ、サービス業につく人もふえて、実際、子供たちを土曜日どうしようかという、保護者が頭を痛めておるような状況もございまして。土曜日休みの場合は、実際やりたいことがある子供はいいんですけれども、大体、これをやりたいというふうに思っている子供が少なくて、実際問題、だらだらテレビを見たり何となく過ごしていると。一方、学習に意欲のある子供は塾に通ったりして、学力の差が物すごくついていると思うんですね。そうしたらまた土曜日を安易に復活させたらいいかということ、またそうやってきたら、やっぱり個性を伸ばすとかいう点ではどうなのかなと思います。

それで、私としましては、もし土曜日を復活させるのであれば、普通の勉強ばかりじゃなくて、地域の方に出前授業みたいな形で来ていただいたりして、地域のよさを知ってもらう機会をつくるとか。学校とか教育というのは、学力をつけるというだけが問題じゃなくて、子供がいかにも人生を豊かに生きていけるかということでありまして、そういった意味でも、確かに土曜日をふやして勉強させたら、学力の面では上がると思うんですけれども、全体的な子供の教育を考えたときに、ちょっとそれはどうなんだろうかなと。

ですので、南あわじ市でもそういう点では十分に検討して、今から考えていかなければならないと思っております。

○小島 一委員長 職務代理者。

○職務代理者（轟 孝博） 僕も38年間、教員生活をやってきたわけで、その中でゆとり教育に携わったというか、週5日制になったのは、現場で5年ぐらいたって、後三十何年間というのは、一週間は、6日間は学校行くわけですけども、大体一週間、10日ぐらいい欲しいなというぐらいい忙しい状態でありました。そういう中で、子供たちが土曜日の使い方について、やはり高等学校なんですけれども、土曜日の過ごし方に物すごく困っておいりましたですね、現実問題として。最近、土曜の使い方になれてきたというよりも、土曜日は遊ぶもんだというような感覚の状態になってきているような感じがするんです。

中学校なんかでは、クラブ活動とか大会も、土曜日にはいけないというようなことが昔、ありました。最近、土曜日でもよろしいということなんですけども。だから、いろんな協会を持つとる者として、週5日制よりも週6日制のほうが、現実には把握できやすいというのが現状であって、今の、週5日制になってるような状態を6日に戻すというのは、かなりエネルギーが要るんじゃないかなと。それと、学校サイドのいろんなスケジュー

ールとか、そういうカリキュラムを変えていかない限り、このまま、やっぱり休みというか、子供たちの小学校からの、ずっと土曜日は休みやでというような感覚を拭い去るのはちょっと時間がかかるんじゃないかなど。

だから、もう少しカリキュラムの方法を、今、郷野委員長も言ったように、やはり再点検、全ての再点検をしないと多分、難しいんじゃないかなと思います。そういう形で今、私は思っておりますけども。週6日制については賛成の人間なんですけども。

以上です。

○小島 一委員長 古川委員。

○教育委員（古川太郎） 失礼いたします。学校教育は知・徳・体ということで、やはりバランスのとれた人間を、小中では基礎的なものをつくるということで、学力だけが、郷野委員長も言われたように、私も、つくるのが学校ではないというふうに思っています。

それでゆとり教育というのを、やっぱり、マスコミであるとかその他、いろいろなところから言われる中で、学力が落ちた、その学力というのは一体何をもって学力と言っておるのかというようなことも問題でありますし、知的な、いわゆるペーパー、算数であるとか理科であるとか、そして、ちょっと下がったらもう、やはり学校の時間数が削減されたからこうだこうだというようなことで、今現状では、確かに土曜日の部分を月曜日から金曜日まで割り振って、さらに3割ぐらいふえましたから、小学校1年生でも6時間目というようなものがつくられるというふうなことで、今の現状は非常にもう、学校現場、子供も先生も本当に忙しいのが現状ですね。かつて、6日制のときであれば、確かに先生と子供とが触れ合う時間というのが非常にあったんですが、今だったらあまり休み時間なんかも触れ合う時間というのが非常に少ないといったような現状です。

話があちこち飛びますが、6日制のときでも、土曜日はノーカバンデーにしている、かなり昔そういうことをやっておった学校も。土曜日はノーカバンデーにして、学校行事であるとか、あるいは地域の人との触れ合い、そういったようなことを取り入れて、先行的にやっていったような学校もありますけれども。知的な部分が、僕は先行して、余りにも子供たちに勉強、勉強、いわゆるペーパーの力、こういったことで本当に徳育的なものであるとか、体育的なものというのが今、非常に落ちてきておるのが現状でないかなというふうに思っています。私もこのゆとり教育で、学校週5日制になるときに、5日制よりも6日制で、ノーカバンデーみたいに、土曜日は学校で預かって、そしてそこでいろいろな、いわゆる国語、算数、理科、社会というような教科の勉強とかそういうものじゃなくて、広く人間を育成していく、広い意味でのそういったものをそこへ持ってきたらええというふうに、その当時、現場では考えておったんです。

で、今、それなら5日制を6日制に、現実的にしていっておる学校も報道されてますよ

ね。楠委員さんがおっしゃられたように。果たしてそれが、いいのかどうか。もう、ころころと変わられると。もちろん、時代に応じて変わっていかないかんですけど、このあたりのところは、もう少し長い目で見ながらいろいろな意見を慎重にしていくなかで、何とか安定した学校教育といえますか、ころころと、6年や7年でころころと学校が変わっていくということになると、もう一つだなというふうな気がしております。

そういったことで、南あわじ市といたしましても、この問題についてはじっくりと、いろんな方々の意見を聞きながら、この政府の行き方であるとか文部科学省からの行き方、あるいは県の方針とかいろいろ、そういったものも踏まえながら、このことについては考えていかなければならないのではないかというふうに思っています。

ちょっとまとまりませんが、以上です。

○小島 一委員長 前川委員。

○教育委員（前川美津子） 私も教育現場に携わった経験があるんですが、一言で申し上げれば、国の施策が目まぐるしく変わり過ぎる。現場主義といいながら、一番悲鳴を上げるのが教育現場の学校の教師であるわけです。私が思うのは、幾ら振り回されても針は天極を指すという言葉があるんですが、学校教育で必要なことは何かということを押さえて、学校のことを考えると。学校現場でよりよい教育を子供に提供させられる場、地域でよりよい教育を提供する、社会が、というふうに、それぞれの持ち場があると思うんですが、5日制を6日制にする、狙いは学力を上げる、この論点というのは私はまだ納得できていません。

全国学力テストというのが実施されまして、同時に子供たちの生活状況のアンケートをとりました。そこで、学力の低下以上に家庭学習の時間が非常に少ない。生活習慣が非常に乱れている。読書の量も極めて少ない。一番の問題が学習意欲の低下という、意欲が低下しているということなんです。意欲の低下というのは、これは全てにかかわってくるので、学びたい意欲であるとか、新しいことに挑戦してみたい意欲であるとか、その子供たちの意欲が、これほど全体的に低下をしている。

義務教育というのは、日本の義務教育のすばらしいところは、全国どこにいてもひとしく同じ教育を受けられるということなんですけれども、淡路の、南あわじ市の教育で何が必要かということは、あわせて考えなければいけないと思っているので、結論を言いますと、国の施策に振り回されるというよりも、今、南あわじ市の子供たちの生活状況とか学習意欲であるとか、意欲に対するその捉え方というものを、学校でできることと、家庭でできることと、そこをもう一度真摯に受けとめないと。家庭で面倒みられないから学校でみてくれというような、そういう問題ではないと思うんです。本当に、生きる力といっていますが、この、今の子供たちが社会に出たときにしっかり生きていける基本的な生活習



慣も、まだ不十分なように思う。学校で箸の持ち方から、給食指導も、好き嫌いやめましようね、ニンジン食べましようねと言って。小学校の教師は昼休み、教師の食事なんていうのは食事ではないと思います。本当に子供たちに食べさせるという、そういうところ、本当に、教師も疲弊しているといえば言葉があれなんです、精いっぱいやっているけれども、学力が低下するのは授業時数が少ないからではないと思います。

意欲を、子供たちの本当に生きる意欲をどうやったら引き出せるかというところが、並行して考えなければいけないことなので、制度については、目まぐるしく変えないでほしい。よかれと思って変えたことなから、10年やそこらで変えるものなのかと。そのためには現場は、一つ一つ手順を追って改革していったるわけです、時間割り一つを見てもそうですし、教える内容一つとってもそうですし。ですから、市としても本当に、よく声を聞きながら、慎重に考えていかなければいけないのではないかと考えています。

○小島 一委員長 岡田教育長。

○教育長（岡田昌史） ゆとり教育、私自身、教育現場を経験してないんで、それぞれの委員さんのお話はなかなかできないわけです。私自身がこのゆとり教育というものについてという持論というのは持ち合わせてないというのか、今まで私が携わった中でその思いを少し、お話しさせていただきます。

まず、平成18年に教育基本法が改正されました。要はゆとり教育というところを見直すと。先ほども委員さんがおっしゃってましたように、国際何とかの学習能力調査で、昔と比べれば日本の順位がかなり落ちてきたと、こういうような話もある中で、その改正がされて、平成23年、24年と、新学習指導要領で、小学校、中学校と、いわゆる年間の授業量が2割近く、科目によっては3割近くとか、教科書の本も分厚くなったり、かなり先生方がその対応をするのに、なかなか時間がとれないような状況になっておるといのが実態かなと思ってます。

そういうことからすれば、土曜日を学校がオープンにするという手もないことはないのかなという気もするんですけども、今、確かにこのふえた部分を学校サイドは、それぞれ教育課程を組む中で議論されて、何とか週5日の中で対応をしておるところなんです。ただ、今、学校サイドもいろんな事務が複雑多岐にあります。ですから、学校サイドで本当に業務改善をして、少なくともいろんなことを合理化をはかって、子供たちに向き合う時間を何とかつくりたいという努力がされておりますけども、なかなかその改善というところがスムーズにいったない状況もあります。これらをこの25年、26年、27年、3カ年かけて極力、県の中でもモデルになっているような学校の状況を見て、先生のいわゆるそういうところを減していくんやと。要は5日制の中で何とか対応できるような体制にもっていききたいという流れで今、進んでおります。

最近、教育再生実行会議というのが新聞で報道されております。土曜日を、例えば、授業をするんでなくて、道徳の時間にもっていったらどうかとか、あるいは、ふるさとを愛する心を育てるための地域の文化に触れ合うとか、そういうものをして、いわゆる子供たちが生まれ育ったところに自信とか誇りを持って社会に出ていくような取り組みも大事であると、こんなような話があります。これ自身も、言われておることは非常にいいなと思います。ただ、土曜日を、学校を開くということについては、本当にこれ、課題が本当に多くあります。今の平成14年にスタートされて、ちょうど10年が経過して、今、見直しのこういう話が出ております。これらについてはやっぱり、課題解決にかなりの時間を要するのかなと。これらも多分、今、中教審で議論されておるような話もあります。これらについては確かに、その中教審の答申がどのような結果になるのかということも、当然注視する必要があるかなと思ってます。

ですから私自身は、当時、週5日制になった時代と現在の、今の南あわじ市の社会的な状況といいますか、家庭環境とか、これらを考えたときに、今、確かに土曜日、家庭で子供を見るというのに、大分大変な家庭もふえてきておるというのもよくわかりますし、このあたり、土曜日の子供の生活をどのようにするかということというのは、これはやっぱり何らか考えていく必要があるのかなという感じは持っております。ただ、子供が減ってきて、今、少年少女のスポーツであったり、あるいは学習塾とかいうのもありますし、このあたりもなかなか、これといった形の取り組みというのは非常に難しいのかなという感じもします。ですから私自身は、今のこの5日というところで今、精いっぱい教育現場はされているという思いでおりますし、土曜日を開くというのには課題が多くて、時間、エネルギーがかかるのかなと、こんな思いでございます。

以上です。

○小島 一委員長 楠委員。

○楠 和廣委員 冒頭にも言いましたとおり、私見の域を超えらんのですが、このゆとり教育の導入については、子供さんを地域社会に返すと、地域社会で育てると、教育するというような発想の一文があって、そういった制度が導入されたように記憶しておるんですが、なかなか、先ほど言うた、話があったとおり、地域社会、また家庭環境の変化によって、そうした、地域と学校の先生方とのコミュニケーションがなかなか取りづらいというのか、そういった部分でなかなか、地域で子供さんを育て、また教育していくという部分が、ゆとり教育の中では、発想だったんですが、それが欠如しておるような感じも、現実にはしてるような感じがするんです。

それと、学校現場でもやっぱり、5日制になれば、実はずちの孫も今、小学校2年生でおるんですが、やはり、学力の習得に対して、やはりスピード感があるように思う。なか

なかついていきづらい部分があつて、相当、学習要領もらなんだら、今の学校現場の授業に対してついていきづらい部分がある。私の家庭での感じた部分ですが、そういった部分があるんでないかと思うんですが。

ゆとり教育の制度に対しては肯定も否定もいたしません、やはりそういった、地域社会が受け皿となつて、土曜日でもコミュニケーション、コミュニティの場を創出するというのがなかなか、そうした地域社会も難しい部分があつて。現実、今、そういった部分で両親が働きに出る、また、おじいさん、おばあさんがおれば子供さんの面倒というのか、守りというんかが行き届くんですが、おらない家はやはり、先ほど委員長が言われたように、ゲームに、また没頭するというような、変化が現実あるように思うんですが。

そういった部分はちょっと危惧しておる一人でありまして、できたらそういった部分もこれからの教育行政の中で、今の現実の、現場の子供さんなり、また、先生の対応をまた考えていただく一つの指針になればなと思つて、意見として出させていただいたところで。ありがとうございます。

○小島 一委員長 何か御意見、今の意見に対してありましたら。よろしいですか。

そしたらほかに、御質問ございますか。

川上副委員長。

○川上 命副委員長 関連してちょっと。きょうの新聞、ちょっと見たら、教育格差について載つとったわな。読売新聞。その中で、結局、先ほど楠委員の言われたとおり、週5日制ということは余りにも、前川先生が言われたとおり、国が教育の組織というか、形態を変え過ぎると。確かにそれは私も賛成ですが、しかしながら、よく考えてみますと、この教育格差というものは、世界的なレベルの中で子供を比べた順に、日本の子供は週5日制になってから非常に学力が低下したと、順応性に欠けるということがデータに出たということでこういう結果が、また新しく週6日制というのが出たと思うんです。そういうふうにくるくる変えるということは、子供がついていけなくなるわ、これはな、実際言うたら。子供は大きな迷惑をこうむるわけ。

そういうことで、私が言いたいのは、南あわじ市の教育委員会も、学校統合もいろいろ幼稚園の、保育園の統合、いろいろあります。そういった中で、私は長期的な展望について、今、先生の言われたとおり、くるくる変えないような学校統合、いろんな教育方針というものを決めてもらいたいわけ。しかしながら、それが教育委員会もなかなか決まらないことの中で、学校統合についても、父兄の中ではかなりの問題点、議論を交わす。我々、一応政治家ですが、政治は教育に余り携わつてはいかんということで、そういったことは幼稚園に関しても学校統合に対しても、あんまり、言わずして口を閉ざしております。そういったことを言うと大変なことだと。今の現状を見ても南あわじ市では、2つの

ところが統合の中でやっぱり、子供を脇に置いていた中で、地域の大人の論争になっていきよる。そういったことは、私は教育委員会に責任があると思う。教育の方針をちゃんと決めて、統合も長期的な展望に立って決めんことには、いつもただらと、いつまでもそういった議論を、民間とか父兄とか地域社会でさすきかいに、こういう問題が起きてって、しまいにはにっちもさっちも。感情的な問題になって教育の現場がややこしくなってくる。

今、私はこの間の安倍政権になって、アベノミクスという、3本の矢、成長戦略ということをよく聞きます。その中で、この間発表しとんのは、人口減少の一番、やっぱり原因であるというのは日本のこの経済的な、何がおくれるのはやっぱり人口をふやさんといかんということで、女性の職場復帰ということを成長戦略の一つに挙げておる。なぜかといいますと、女性はやっぱり、この人口減少の中で、半分女性ですから、そういった女性の力というものを社会の中で必要としてなっておると。そういった中で、女性が働きながら子供を産むということは、今の日本の社会機構の中では全然、そういったことができてないということで、企業にお願いをして、有給休暇を3年とかいうようなことも話も出ております。そういったことで、子供を産んでもらうし、女性は職場で社会の中で男性と一緒に働いていただくと。

そういったことに対してそれらをどうしたらいいかということは、教育委員会そのものが、日本の教育を受け皿というものが、全然なっていないということよ。子供の受け皿。子供の幼児教育が人間形成の中で一番大事だとよく言われておりますが、確かにそうです。3歳児までは親が育てるのが一番いいわけで。しかしながら、今の日本の情勢から見ますと、やっぱり働かなければ食べていけないという家庭状況の中で、やっぱり働く。ということは、受け皿ということは、教育委員会の保育、幼児教育。それをもっとお母さんが安心して働けるような受け皿と。

南あわじ市も27年度からどうこうとか、いろいろ言っつて。そんなもん、27年、28年、長期的な展望というか、早くそういったことを解決するような方針というものを打ち立てると。これ、時代は常に動きよる、スピード。今、ここで言うた、物すごい早いスピードで動いとるわけ。それについて行こうとする組織を決める皆さんが、どうも私はこういっつたことを、教育委員さんの目の前で失礼な言い方やけど、ちょっと考え方が遅いと思う。結論が遅いと思う。もう少し、今の安倍さんの言われたとおりに、そういった、子供の教育というものは大事である、幼児教育は特に大事であるということは、やっぱりそういう教育格差をなくすためにも、そういった環境を同じくするためにも、そういった受け皿というものを、ちゃんと早くしてもらいたいということ。結論は私はそうやと思う。

やっぱり、それで、小学校、中学校と、これはもう、段階的に上がっていくけど、やっぱり環境そのものを何とか、早く結論を出して、学校統合ももう少しスピード感のある統合を、目標というものを定めて、地域社会にやっぱり、皆さんが納得いくような結論を

出していただきたいと、かように思います。これに対してちょっと、考え方をひとつ、お願いします。

○小島 一委員長 答弁を。  
教育長。

○教育長（岡田昌史） この学校再編、あるいは幼稚園の、保育所の関係、これはもうずっと、文教の委員さん方には経過報告もさせていただいてきております。言われるとおり、早くできることに、私らも思いは持っております。いずれにしてもこれ、基本はもう子供のことを考えて最終的な取り組みという形でもっていくわけです。その中にどうしてもやっぱりその地域、地域の思いとかいうのもございます。ですから、我々も保護者の意向、地域の思い、これが一緒になってくれれば本当にありがたい話なんですけども、どちらも、保護者も地域も、その統合なり再編に、どうしても前向きな答えが出てきていない状況で、そこをあえて我々がというところは、非常に難しい状況でもあります。ですから、確かに思いは、その思いのとおりなんです。ですから、それはそれで、我々も推進を継続しておるのが実情ですけども、なかなか理解が得られない状況のところもあります。

ですから、言われておるように、もっと教育委員会が主導的にやれやと、こういう話というの、そういう意見も、あるところからもいただきます。ですから、その辺が非常に私ども今、対応しておるところでは、言葉ではなかなか言いにくいんですけども、非常に苦渋しておるのが実情であります。ですから、確かに意見として、その地域にあっては我々も、それはそれで説明もし、いろんな課題なり問題点をともどもに考えて進めていくつもりは重々持っておりますけども、苦渋の選択をしているというところもあります。

それから、特に幼児教育の受け皿というようなことがあるんですけども、確かに今、旧の西淡のエリアでは、幼稚園というような取り扱いの中で、3歳児未満の子供の受け皿というところが、その周辺で受け皿がないと、こういう話であります。これはもう、まさに去年、おとし、ずっと回ったときに、そういう意見をいただいております。ですから、それを改善すべき取り組みということで、去年も教育委員会の中で議論しまして、幼稚園の再編というところはやっぱり保育園化を向けてやらないと、3歳児未満の保護者の皆さんの期待に沿えないというようなことから、そういう方向で今、進めております。

もっと素早くという話があるんですけども、ここ近々に4園の保護者の皆さんに集まっていたくような形で進めていきたいと、このように思っております。回りから見れば、遅々として進まないような思いが委員の皆さんにあるのかもわかりませんが、私らも限られたメンバーの中で推進をして、できるだけ早くそういう方向に持っていきたいと、このように思っております。

以上です。

○小島 一委員長 よろしいか。  
川上副委員長。

○川上 命副委員長 いや、私が言いよるのはね、それは遅いとか早いとか、それはもう今、教育長が言われたとおりですが、私もひ孫二人、今、おるんですけど、今、3歳児までは旧西淡では受付とかも、みかり会しかないわな。その中で、市村に行きよる。市村に行きよるのが、3歳児になったさかい、このたび、伊加利幼稚園にはめてくれと、入れ言うても、必然と子供は入らんわけや。やっぱり小さいときに友達として、そういうふうにして大勢の仲間おるさかい。今度はどうせ小学校に行ったら行かんなん。そういう子供心に、これから大分、これ説得せなあかん。だからそういう教育の機会均等とかいろいろ、きれいごとを言うけど、一つもそんなことはできとらへんわけやな、幼児教育ではな。そうでしょう。統一したいけど、保育園はあるし、幼稚園はあるし、これが、統一すんのが当然でしょう、これはっきり言えば。

どっちにしても、辰美中学校でも今、空いておると。父兄がやかましく言いよんのはな。そういうような跡地利用でも、何でもっと早うせんのだというようなことも。そういうことが目の前に立ちふさがつとるさかいに、結局は、もう少し教育委員会も子供の教育、そんな機会均等やきれいごと言うたり、学力とかゆとり教育とか言うけど、要は現場のその受け入れ態勢をもっとしっかりしてほしいということを言いよるわけ。それだけです。

そやさかい、委員さんは、失礼な言い方になったか知らんけど、どうもそういった中で対応が遅過ぎると思う。もう少し敏感に。子供は日々、成長してますからね。子供の成長を妨げんような、やっぱり。教育委員会もそういった、大事な子供やさかいな、そういったことはやっぱり、敏感にもっとスピード的に動いてもらいたいということで、終わります。

○小島 一委員長 教育委員さんから何か、反論、意見ございましたら。  
轟職務代理人。

○職務代理人（轟 孝博） 反論やないんだけど、今、川上先生から、早くつくって受け皿をきちっとせえというのは、教育委員会サイドとしてはそういうことは百も承知するんだけど、現実問題として、市の行政自体がその受け皿をつくるのに賛成するのかせんのかいうところがネックになってきてるんです、基本的にはね。だから今、僕が最初に話しよったのは、志知地区なんです。一番のネックは、僕自身は。三原志知と西淡志知、あの小さい学区が2つに、川を挟んで分かれてるんで、あれを何とか合併したらどないなんやと。昔の水利権のことでごちゃごちゃあるので、できないらしいんですけども。それ

も市の行政として、今も吉備国際大学が来てるから、やむを得んのですけども、あの志知高校の跡地を、保育所が坂の下にあるわけですよ、志知の。あれを全部、保育所から小学校、全部上へ上げれば、かなり広い校地でできるんじゃないかという話までしとったんですけども。あれは辰美中学の先生もおっしゃることも、行政自体のほうからそういう形でやらないと。

私たちがやってくれと言ったって、しょせん教育委員会は言うだけで、現実問題として行政が動かない限り、できないんですからね。そこらはやはり、二人三脚でやっていかないといかんと。教育委員会は意見を出せば、その必ず市会のほうがやってくれるんであればどんな意見でも出しますよ、これから。そういうことなんです。だから、そこはやっぱり、仲よく二人三脚で前向きでやっていかないと多分、いけないんじゃないかなと思うんですけども。

以上です。

○小島 一委員長            ありがとうございます。

川上副委員長。

○川上 命副委員長        まあ、ええ意見、聞きました。ということは、我々はある限り、教育の現場には、全て携わっては、やっぱり教育と政治というのは切り離したという考えで、幼稚園の問題でも、大概、口やかましいんやけど、やっぱり失敗すれば、若い人に責められたらもう、こたえるさかいな。

やっぱり教育は教育委員会という、そういう方針を聞いた中で、行政がタッチしていくと。行政が先に進むということはなかなか、僕自身は、個人ですよ。今、先生、ええこと言うてくれたんで。ほんなら、これから議論を交わしましょう。ありがとう。

○小島 一委員長        よろしいか。

ほかに御質問、御意見、ございませんか。

ちょっと休憩とりましょうか。まだ早い。もう一人ぐらい。

原口委員。

○原口育大委員        さっきのゆとり教育の話なんですけど、なかなかこんな簡単に解決できる問題でないんで。ただ、今、一通り委員さんの御意見聞かせていただいて、本当に共感を持ったのは、目的を持ってない子供と持つてる子との学力格差というか、その土曜日に関して、使い方に関して、委員長言われたように、そこで学力格差が拡大しておると。また、前川先生が言われたように、現場の悲鳴であったり、あるいは生活の乱れ、習慣の乱れというのが、あるいは意欲の低下というのが問題であるというのは、本当に、一番共感

を持ちました。

僕も平成11年に小学校のPTA会長をしょって、研修会とかいろいろ引っ張り出された中で、ちょうど寺脇研さんの講演も、その年は3回、一緒の話でしたけど、全国と近畿と県で、だから何か、3回ぐらい聞きました。それで、そのとき僕らが思ったのは、どう考えてもこれは公務員さんの週休2日のほうを優先した。やけども、それは表に出さずに、ゆとりで育てていくと、地域にも協力いただいてどうのこうのという説明を、一生懸命、寺脇さんされておって。

例えば、できる子とできない子の差がつくやないかということに対して、そのできる子ができない子を教えたらええんやと。そしたら、できる子はもっとできるようになるし、できない子も救われるんやみたいなことを寺脇さんが言うとして。それが、そのときはそれで、そんなもんかなと思ったんですけど、実際今、平成14年からですか、やられてきて、その辺は現場でどうやったんかなというのが。そんな、寺脇さんが言うてたようなことと言うのは、できてたんかなというのが、一つ気になってます。

それで、スピード感の話が出てましたけど、例えば今、予防接種で風疹のやつが出てますけど、あれもちょうど、その近いころかな、中止してたんですよ。で、今問題になって、慌ててやっとなるわけですけど。やっぱり、結果というのは、10年、20年先に、その一つの世代を巻き込んで出てくるんかなというふうに思ってたして、教育もおんなじやと。だからゆとり教育とかで、何年間か、カリキュラム変わってやった弊害というか効果というか、それは10年なり15年先に、やっぱり出てきてしまうんかなと。10年、15年という、長いようで、小学校、例えば10歳の子が10年、15年たったら今度は親になっとなるわけで、そのとき育った子供が今度、親になって、その親がどういう教育方針でいくのかという部分にかかわってくる問題やと思うんですよ。だから、ごっつい、そこら辺は、僕、解決策を持つとなるわけでないんやけども、やはり教育の大事さというのはその辺にあるのかなと。

僕も、旧町のときに、何かいろいろ諮問委員とかしてるときに思ったのは、例えばごみの分別が始まったころやったんですけど、三原もどンドン、し出したころやったんですけど、全くできないというときに、それならまず子供に、しっかりとできるように学校で教えたらええん違うのと。例えばそれも、10歳の子がそれをきっちり学校で、先生の言うことよく聞くとするんで、しっかりと覚えて、家に帰ったら親はまねするやろうし、その10歳の子が大人になったらもう、その時点で今、年寄りはどうせんか知らんけど、社会全体がリサイクルというのは定着するんと違うのということを考えたことがあります。

それと同じ、教育というのはそんなスパンの問題であると思うし、そういう使命を持つと思うんで、教育長にしたらなかなか、そんなこと言われても、急にはできらんというのもその辺にあると思うんです。何の解決策も持ってませんけど、そういうことに関してぜひまた、そういう意識を持ってやっていただきたいなというふうに。当然、持ってお



と思うんですけども、思っております。

さっきの寺脇研さんの言うてたことが、そのゆとり教育の間でかなりできたんかできなかったのかという部分、もし感想をお持ちでしたら、お聞かせ願いたいなというふうに思います。

○小島 一委員長 今の寺脇さんという方、私も存じてないんですけども、そういう今、原口委員が言われたようなことで、もし、何か御意見を持っておられる方おりましたら。

ありませんか。言いつ放しの質問になりますけど、よろしいか。

そしたら、11時までちょっと休憩をとりたいと思います。お茶もありますので、飲んでいただければ。

(休憩 午前10時50分)

(再開 午前11時00分)

○小島 一委員長 一旦再開させていただいて、ざっくばらんな意見が休憩中出ていましたので、そういうかたちで今後、意見交換を行いたいと思いますので、よろしくお願ひします。

暫時休憩します。

(休憩 午前11時01分)

(再開 午後 0時00分)

○小島 一委員長 再開します。

先ほど川上副委員長の発言において、若干不適當なところがあったと思いますので、後刻精査して、私のほうで処置させていただきます。

本日は本当にお忙しい中を、中身の濃い意見交換ができたと思います。次回もしありましたら、教育委員さんからの質問を多数いただけたらと思います。

本当にきょうはありがとうございました。これをもちまして委員会を閉会いたします。

(閉会 午後 0時03分)

委員会条例第30条の規定により、ここに署名する。

平成25年 5月20日

南あわじ市議会文教厚生常任委員会

委員長 小 島 一